

## 体験を通した活動を

秋山 和夫

保育者にも理解できにくい幼児の行動が増えてきている。いらいらして落着きのない子、奇声を発する子、友達とうまく遊べない子、とくに自閉症というレッテルをはられていなくても、そうした行動を示す幼児が目につくようになってきている。

このような行動が増えてきた理由や原因はさまざまであろう。これまでは、それらは親子関係のあり方の中で考察し、改善を図っていくべきものと考えられることが多かった。たしかに、子どもがどのような行動様式を持つかということは、親の養育態度によるところが大きい。

その場合、過保護、過干渉、放任、受容、承認といったキーワードで、親子関係の現実を考え、反省して

いこうとすることが多い。

子どもをより良くしていくために、幼児が体験を通した活動を見直してだけやっているかという観点で、幼児の活動を見直していくことが、現在とくに必要なのではないか。具体的な経験を通した活動の欠如が、現在の子どもの行動をおかしくしている原因のひとつであると私は考えている。

血のぬくもりのある動物に接していれば、動物への愛情は自然に湧いてくる。毛虫を観察したり、草花を育てていけば、自然の不思議さにも気づいてくる。ざりがにに指をはさまれたり、どじょうがなかなかつかめなかった経験を持っておれば、自分の思いどおりにならない世界のあることに気づいてくる。

友達に手伝ってもらってはじめて箱車の釘打ちがうまくできたこと、友達数人と協力して大きな砂山を作った遊んだこと——こうした活動の中で、友達といっしょに活動することが、一人で遊ぶより異なった面白さが味わえ、又、友達との助け合いの必要性や相手への思いやりの心が育てられていく。

幼児期の教育というと、文字を教えたり、ピアノを習わせたり、体操教室に通わせることによって、知識や技能を身につけさせることだという考え方を持つ人が多い。そのために、動植物を手にしたたり、仲間との遊びは子どもの閑つぶしであり、親からすればどうでもよいお遊びとしか考えられていない。

新しい幼稚園教育要領ではその内容改善の視点として次の三つが挙げられている。

ア、人々のかかわりを持つ力を育成すること。  
イ、自然とのふれ合いや身近な環境とのかかわりを深める。

ウ、基本的な生活習慣や態度を育成すること。

これらのことを幼児の身につけさせるためには、具体的な活動や体験を通す以外にはないのである。単なるお説教ではどうにもならないことなのである。

新幼稚園教育要領で、これら三つの点が強調されているのも、現在の子どもの現状をふまえてのことである。幼児に具体的な活動や体験を豊かにさせることによって、人間らしさを回復させたいと願うからである。

文字やピアノの指導では、その指導効果が誰の目にもはっきりする。しかし、体験を通した活動による幼児の内面の育ちは、一般の大人にはなかなか見えにくい。

幼児を人間らしく育てていくために、幼児教育はどうあるべきかが、鋭く問われているのが現在である。

(岡山大学)